

第112回 日文研フォーラム



「道行き」と日本文化

— 芸能を中心に

The Michiyuki in Japanese Performing Arts



アリソン トキタ

Alison McQUEEN-TOKITA

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公開を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 河合 隼雄

● テーマ ●

「道行き」と日本文化

－ 芸能を中心に

The Michiyuki in Japanese Performing Arts

● 発表者 ●

アリソン トキタ

Alison McQUEEN-TOKITA

モナッシュ大学助教授

Senior Lecturer, Monash University

国際日本文化研究センター客員助教授

Visiting Associate Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies



1998年11月10日(火)

発表者紹介

アリソン トキタ

Alison McQUEEN-TOKITA

モナシュ大学助教授

Senior Lecturer, Monash University

国際日本文化研究センター客員助教授

Visiting Associate Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies

1947年生。メルボルン大学で英、仏、独文学・語学、教育学、パリ大学で日本語と日本文化、東京芸術大学で日本音楽(邦楽)の勉強を経て、1989年にモナシュ大学日本研究学科で博士号を修得。この22年以来、歌舞伎舞踊音楽の伴奏である清元、常磐津などからさかのぼって、人形芝居(文楽)の地である義太夫節、中世語り物の代表的な平曲、さらにその源となったとされている講式声明まで、日本の語り物音楽を研究し続けた。

1988年以来、モナシュ大学日本研究学科で講師、それから助教授となり、日本音楽資料室所長も兼任、1995年からメルボルンの日本研究センターの所長を務める。

1998年度京都にある国際日本文化研究センター(日文研)で一年の共同研究を担当する。テーマは「日本の語り物 - 口頭性、構造、意義」

ホームページの URL は: <http://www.nichibun.ac.jp/tokita/mokuji.html>

年内に、ドイツの Baerenreiter 出版社から“Kiyomoto-bushi: Narrative Music of the Kabuki Theatre”(「歌舞伎の語り物 - 清元節」)が出る予定。

主な著書:

- 1992 「清元節の音楽分析 - 語りの小段を中心にして」『芸能の科学』(東京国立文化財研究所) 20 (143-206).
- 1994 Japanese Music Archive: Catalogue. Melbourne: Japanese Studies Centre.
- 1995 “The image of the yujo in Japanese musical narratives in the Edo period (1600-1867)”. Representations of Women in Japanese Cultural Forms. Melbourne: Japanese Studies Centre, 1-20.
- 1996 “Anne Boyd and Asian music: the formation of a composer”. Japan Review Number 7, 1996, 185-198.
- 1996 “The Influence of Japan on the Music of Barry Conyngham” in Language and Cultural Contact with Japan. Occasional Paper of the Japanese Studies Centre, Monash Asia Institute, Melbourne, 101-120.
- 1996 “Mode and Scale, Modulation and Tuning in Japanese Shamisen Music: The Case of Kiyomoto Narrative”. Ethnomusicology 40, 1, 1-33.
- 1996 『日本伝統音楽における語り物の系譜 - 旋律型を中心に』日文研フォーラム73号報告書 国際日本文化研究センター
- 1997 「語り物の音楽分析」『岩波講座: 日本文学史』第16巻、岩波書店(299-321)

道行きは、紀行文や歌物語などの文学ジャンルをみちびき出しましたが、本質的には口頭的なものです。ですから説経、ゴゼ歌など純粋な語り物においては非常に重要です。また語り物と深い関係にある能、人形浄瑠璃、歌舞伎舞踊などでも大きな意味を持っています。

道行きは、道を行くこと、旅することです。英語にも wayfarer という美しい言葉があります。そして、「道行き」は、ことばになった旅といえましょう。そこでは、風景がダイナミックに描写されています。ピジョー (Pigeot 1991: 3) は詩的な地理学という定義を道行きに与えています。

今日は、日本の文化、とくに芸能にあらわれた道行きを中心にお話ししましょう。

言語で詩的に表現された旅としての「道行き」には、二つのタイプがあります。一つの場合から別の場所へ移動する実際の旅と、異界へといたる精神的な、形而上的な旅です。

また、その方向性も二つあります。一方向的な旅と巡る旅です。一方向的な旅には、熊野、高野山、天王寺などへのお参りがあります。また、東下りのような流謫の旅がありますし、死へと向かう心中や、それに近い姥捨てもあります。巡

る旅の典型は、四国八十八所霊場のような巡礼でしょう。曲舞（くせまい）には山廻（めぐ）りがあります。

起 源

「道行き」はおそらく古代にさかのぼることができるでしょう。そのころの旅は危険に満ちていました。そのような危険から旅人の身を守るために、まず、旅立ちに先だって、道中の安全を祈って旅人自身や見送りの人が歌を詠みます。道中でも、曲がり角になると歌を詠み、待ち受けているおそれのある危険を除くというようなことをしました。歌は旅の安全を守る、言葉のおまじない (Plutschow 1990: 80-105) として機能し、宗教儀礼的な様相を持っていました。こうした歌は古事記、日本書記、万葉集におさめられています。万葉集から例を一つ挙げましょう。

吾妹子を夢に見え来と大和路の渡瀬ごとに手向けそわがする

(高木市之助「ほか」校注、一九五、三三、歌三二〇)

道行きは、重要な道を口頭で語る、言語化された地図だったのではないでしようか。

道すじをどのように語るのか。ここで、書かれたテキストを持たない、口頭で語られる物語の特徴についてお話ししましょう。まず、もちろんのことですが、聴覚的であり、視覚的ではありません。それはどういうことかといいますと、目の前には語り手があり、語り手と聞き手が、同じ場所で時間を共有するということです。聞き手が物語を聞くために、自分の時間を語り手の時間にゆだね、物語は語りの時間の中で進展します。そうした物語は、散文と違い、韻律をもっています。日本語の場合、かんたんにいいますと、七・五調で語られるということになります。インド・ヨーロッパ語あるいは中国語などでは脚韻がありますが、日本語の語りでは脚韻はめだちません。むしろ、頭韻はよくあり、後でお話しするもの尽くしの中などでみられます。

さて、語るといっても、書かれたテキストがありませんから、その場において口頭で構成を行います。したがって、繰り返しもありますし、いい換えもあります。決まり文句も多い。しかし、そのほうが、語り手からすれば語りやすく、聞

く方もよく分かります。そうした語りの技法がいろいろありますが、きょうのテーマ道行きに強く結びついたものとして、もの尽くしについてお話ししましょう。これは関連のあるもののリスト、あるいはカタログといってもよいものですが、文字テクストでは注や付録で処理されるところのものでしょう。道行きはもの尽くしのひとつで、地名をならべて、道すじや旅の経過を表現します。

さて、道行きが文字に書かれて定着したり、あるいはその結果、文学形式として成立しますと、文学として評価されることになります。

文学研究家は、文字に書かれて定着した道行きを中世的な、文学としては洗練されていないものとして、低い評価を下しがちです。ピジョー (Pigeot 1991) は、もの尽くしは物語に割込み、中断するものとしてとらえ、その点でも否定的です。ただし、歌に詠まれた名所、歌枕が使われますから、道行きが文学的な伝統に連なるということは認められています。また、もの尽くしはいつも一人称の語り手が語りますので、もの尽くしのある御伽草子は、口頭的な性格があるということになり、ピジョーは御伽草子と能、幸若、説教節などの口頭芸能の間につながりがあることを示唆しています。

シェーンバインは、文学形式として定着した近松の道行き文を取り上げ、それ

が七・五音節できており、枕詞や掛詞や縁語を使った詩的な表現を特徴とするとしています。地名もならべられています。実際のルートに沿っているのがぶつうで、この方向性は地名の順序だけでなく、「行く」「着く」「うち過ぎて」など出発や到着を示す動詞の使用や、「はるばると」などとの距離を示す副詞や、「はやばやと」など速度を表す副詞などによっても強調されます。このように、文字テキストとしての道行きの性格を明らかにしています。では次に、芸能における道行きを見てみましょう。

芸能における道行き

芸能では、道行きは詩的に言語化された地図を口頭で語る機能と、もう一つの世界、異界へ言葉で入っていくという宗教的な機能を維持しています。

まず、第一の機能ですが、じっさいに行ったことはなくとも、道行きを聞くことで旅を体験でき、言葉になった風景のなかに身を置き、その場所の聖性を体験します。

先ほど、道行きの一方方向性についてお話ししたときに、お参りの例をあげまし

たが、芸能では宗教性がたいへん重い意味をもっています。中世では、熊野比丘尼が、寺社参詣曼陀羅をもって各地を歩き、熊野のような聖地から遠く離れた人々に境内を絵解きをしています。

旅はこの世とあの世、すでに知っている世界と未知の世界の間の、境界という時間と空間の中で行われます。中世では、道そのものそしてそこを生活の場とする人々が、芸能の場合、説経者や熊野比丘尼などの芸能者が、境界を体現し、彼らの活動が境界を形成していました（広末一六八、三）。その芸能は異界を表現することでもありました。あとでお話する、『小栗判官』がよい例ですが、それを聞いた人々は、異界をも経験したということにもなるのです。

日本の芸能における道行きの発展

つまり、能、説経、浄瑠璃、歌舞伎舞踊では道行きは一つの世界から別の世界、ある一つの状態から別の状態への通路として機能するということもできます。それを舞台の施設として具体化したのが、能の橋懸りであり、歌舞伎の花道ということになるでしょう。

それぞれの芸能の中で道行きは、次のように展開しました。能、幸若舞、浄瑠璃では、物語の一部ととして、取り入れられました。そのうちの能、浄瑠璃、あるいは歌舞伎舞踊では、さらに劇的構成には欠かすことのできない一部、つまり手段となりました。つまり、道行きは人物が登場する場面を構成するようになります。説経では、ジャンル全体が道行きとっていいほどになりました。

言語テキストと音楽における道行きの特徴

では能、平曲、説経、浄瑠璃、歌舞伎舞踊といったジャンルを取り上げ、言語テキストと音楽における道行きの特徴をみてみましょう。

もっともよく見られる道行きのルートは、東海道です。それも京都から東への方向です。いわゆる「東下り」で、否定的な含み、都落ちの感じがあります。それは、首都すなわち文明や洗練された文化から離れて、未知の危険で粗野な領域への旅です。そのような例が『伊勢物語』の「東下り」、『平家物語』の「海道下り」、『太平記』の「俊基朝臣再関東下行事」、能『盛久』などに見い出すことができます。

『平家物語』の「海道下り」は、全体が旅です。最初の関所は逢坂の関ですが、次のように長く語られるのは、おもしろいところです。

こゝはむかし延喜第四の王子蟬丸の、関の嵐に心をすまし、琵琶をひき給ひしに、伯雅の三位と云ッし人、風の吹かぬ日も、雨の降る夜も降らぬ夜も、三とせが聞あゆみをはこび立ち聞きて、彼三曲を伝えけむ、わら屋の床のいにしえも、思ひやられて哀也。

（高木市之助「ほか」校注、一九〇〇、三五〇）

これは、盲目の「平家」語りが、蟬丸を琵琶法師の創始者としているためでしょう。しかし、書かれたテクストを持たなかった説経節の道行きに比べて、おおむねテクストは文学的に磨かれているといえるでしょう。平曲の「海道下り」の音楽構造を見ると、クドキー下げー中音ー中ユリー中音ー初重ー三重ー下りなど叙情的で軟らかな感じのする音楽素材が連ねられています。

能

ほとんどの能では、道行きは劇の構造の一部となっています。夢幻能では道行きはとりわけ重要です。ワキは旅の僧で、都から出発して重要な神聖な場所に巡礼し、また都に帰りますが、この旅により、僧も聴衆も夢幻という、別の世界に行くということになります。ワキは、霊を呼び出すための媒体で、霊にとり憑いた悪霊を祓う役割も果たします。霊が出てくるのは、夕方から夜にかけてで、夜明けにまた消えていきます。

通常、一曲の能における道行きの場所は上ゲ哥で、その形式に従い、わずか七行ほどからなっています。一行は五音節プラス七音節です。『敦盛』では次のようになっています。

〔上ゲ哥〕　ワキ九重の、雲居を出でて　行く月の、雲居を出でて　行く月の、
南に巡る　小車の、淀山崎を　うち過ぎて。　昆陽の池水　生田川、波ここ
もとや　須磨の浦、一の谷にも　着きにけり、一の谷にも　着きにけり。

（横道萬里雄、表章校注、一九六〇、二三四）

説経節

説経節は、各地を説教して歩く僧から生まれましたが、神仏習合のため物語には神道的な要素も色濃く入っています。中世の後期には音楽的な芸能となり、江戸初期になりますと操り人形と合体した浄瑠璃と平行して発展し、三味線が伴奏するものとなりました。一七五〇年代になりますと、独立した芸能としては消滅しますが、説経節があったことは、奈良絵本として十七世紀から今に伝わる手書きや印刷・板行されたテキストによって証明されています。各地を歩く、晴眼の説経節語りが、大道で大きな傘を立て、その下で、語っている絵も残っています。また、浄瑠璃の諸ジャンルに「説経」という音楽素材（旋律型）が残っています。説経節は親と子、夫と妻の別れと再会の世界です。大変広い空間・地理的拡がりを持ち、その物語はすべて漂白の旅、別れと再会、その喜びと悲しみが表されています。つまり、旅は説経の本質的な部分をしていますが、それは説経語りの人生の本質的な部分でもありました。

説経の道行きは、能や平家物語ほど文学的な修辞をほどこされておらず、その多くは通り過ぎた場所を羅列したリストにすぎないといえるでしょうが、実際の

旅をかなり正確に語ったものという印象を与えます。一行が七音節プラス五音節という韻律を持つ簡単な修辭法が基本ですが、「くを早すぎて」「くはあれかとや」「く先をいずくとおといある」など決まり文句を頻繁に使います。後の淨瑠璃とは違って、登場人物の感情はまだ道行きの重要な部分になっていません。

『小栗判官』は説經の旅として最も強力な例ですので、ややくわしく見て行きましょう。旅は物語に完全に組み込まれています。この物語の中心になる旅は、病氣から治療のための巡礼です。

長い物語の中で場面と場面が変わる際に、旅は大事な趣向として使用されるのです。

まず、あらすじを紹介しましょう。常陸の国の小栗は、相模の国の横山殿のひとり姫、照手（てるて）の姫に恋をして、押し入って婿入りした。横山殿に毒の酒にて責め殺されたが、地獄から帰って来、餓鬼阿彌とよばれて、這い回る姿となった。いっぽうの照手は、父に命じられた兄弟に殺されかけたが、兄弟の情けで助かり、あちらこちらに売られて、美濃の国の青墓で下女となる。小栗は、車に乗って曳かれ、熊野本宮湯の峯に入り、病い本復して、照手に再会し、横山殿の仇を討ち、あとは幸せに暮らす。

『小栗判官』では、すべての旅は対等にあつかわれるわけではありません。たとえば、後藤左右衛門という小栗の使いが照手からの手紙を持って小栗のもとに帰るとき、大変ありふれた決まり文句で物語られるのです。「天や走る、地やくぐる」と急がれ蹴れば、ほどもなく常陸小栗殿にとかけつくる」(室木、一九七、三七頁)。

常陸という目的地以外は地名がまったく挙げられていません。

それに対して照手が一人の商人から次の商人へ売られるくんだり(同、二六)は全然違います。道行きよりも物づくしに近く、売られる度に照手のおかれる状態が悲惨になります。それは、相模から加賀、越前、敦賀、大津を経て、青墓(現在の大垣)で終わり、そこで宿場の下女になるわけです。おそらくこういう日本海側の地名は、人買いなどなにか暗いイメージを担わされていたと考えられます。

物語の中心となるのは、地獄から帰る小栗の長い旅です。この旅は、この世とあの世の境目の時間と空間を通して行われます。地獄からの旅の終わりは熊野本宮湯の峯温泉に入浴する時です(広末二六八、五)ですが、この旅は地理的、水平的な旅でもあれば、死から生への復活の旅、つまり地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天上の六道を上る垂直の旅でもあります(同、六五)。

聖をはじめ何人もの人々がリレー方式で、土車にのった小栗を、相模から熊野

本宮湯の峯まで引っぱってくれます。その一人は照手でしたが、互いに相手が何者であるか気づかないまま、また別れていきます（室木、一五七、二五三〇）。

説経の道行きは能のように文学的に洗練されていませんが、単なる地名の羅列だけでもありません。テキストのリズムは軽快かつエネルギッシュで、生き生きと進行します。はっきりと韻律をふみ、いくつかの詩的な技巧を使いますが、しばしば、「坂はなけれど歌う坂」、「新しけれど古渡り」（同、二五五）など駄洒落になっ
てしまうことがあります。リズムカルに句読点を付けるように、道行きの段階はさまざまな宿場町で区切られます。また餓鬼阿彌（小栗）が土車を引く人々のリズムカルなかけ声の「エイサラエイ」も同じように句読点として機能し、マンガの擬態語を連想させます。こういう言葉遣いははっきりと口頭的な語りの技法を示しているといえるでしょう。次のようなぐあいです。

檀那が付いて引くほどに、吹上六本松はこれとかよ。清見が関に上がりては、南をはるかにながむれば三保の松原・田子の入り海、してしが浦の一つ松、あれも名所か面白や。音にも聞いた清見寺。江尻の細道引き過ぎて、駿河の府内に入りぬれば、昔はないが今浅間、君のお出はに冥加なや、蹴上げて通

る丸子の宿。雉がほろろを宇津の谷峠を引き過ぎて、岡部噺をまん上がり、松にからまる藤枝の、四方に海はなけれども、「島田」の宿を「えいさらえい」と引き過ぎて、七瀬流れて八瀬落ちて、夜の間に変わる大井川、鐘をふもとに菊川の、月さし上す佐夜の中山。

(同、二四)

人形浄瑠璃の道行き (義太夫節)

人形浄瑠璃の前身である中世の古浄瑠璃のテキストでは、物づくしは目立った修辞法・技法としてみられます。古浄瑠璃の道行きはだいたい快活で、晴れの旅で、名所づくしや都廻りなど名所を廻る旅となっています。

その後、浄瑠璃は人形劇と結びつき、近松門左衛門が浄瑠璃大夫の竹本義太夫と一緒に仕事をした一六八〇年代、道行きはドラマの最も重い場面の後で、内容的にも音楽的にも一転して華やかな、明るい場面を提供し、テキスト面でも、音楽面でも複雑になりました。それにつれて、語る太夫の数が一人から数人に増え、三味線方も同じように増えました。

近松は一七〇三年に世話物というジャンルを生みだし、道行きはその三幕目を

占めるようになりましたが、そのほとんどは死への道行きでした。そのテキストは『心中天の網島』の「名残の橋づくし」のように、物づくしをすることがよく行われました。次は「名残の橋づくし」の一部です。

：今置く霜は明日消ゆるはかなき譬のそれよりも先へ消え行く閨の内。いとしかはいと締めて寝し。移香も何と。流れの。蜷川。西に見て。朝夕渡る。此の橋の天神橋は其の昔。管丞相と申せし時筑紫へ流され給ひしに。君を慕ひて太宰府へたった一飛梅田橋。跡追松の緑橋。別れを嘆き。悲しみて跡に焦がるゝ。櫻橋。：

(近松門左衛門、一九五、八三)

大阪の数多くの橋を渡るわけですが、その橋の名前を語っていくことは、数珠を手にかけて拝むようです。『曾根崎心中』の初めの方では、それとは対照的な「観音巡り」という町の婦人の気晴らしのための道行きが出てきます。同じ大阪の町とはいいいながら、その道行きという旅の意味はまったく違います。

世話物の道行きでは、男女の主人公が会話を交わすなど、これまでにない演劇的な展開を見せます。もっとも重要なことは登場人物の思いと感情が風景に投影

され、風景も登場人物の思いと感情に投影されていることです。

音楽面でも、流行り歌の断片が道行きの途中で、切れ切れに聞こえてくるように挟み込まれるなど、多様化しています。

近松の道行きは、もちろんある場所から心中する場所への移動で、時間的にはいつも真夜中から夜が明けるまでの間に起こります。けれども、場所の移動は感情の旅ほど重要ではありません。先ほど述べましたが、『心中天の網島』の道行きは「名残の橋づくし」という形を取ります。

一七三五年からは合作により時代物がおおく作られました。ここでは、道行きは、長い旅の旅程の一つとなっており、旅全体をそれで代表させています。旅の途中に立ち止まり、そのときの感慨や、それまでの追憶、これからの期待などが表現されており、そこだけ美しい一幅の絵のような別世界として描かれています。目を楽しませる見所、風流（ふりゅう）の性格をもつといってもいいでしょう。

有名な例は『義経千本桜』『初音の旅』で、満開の桜の中、義経の家来忠信（実は狐）は、白拍子の静御前を案内しますが、忠信は親の革が張ってある静の鼓を慕うという場面です。旅の途中で一服をしているうちに、静はクドキという哀れな、しかも常套的性格が強い小段で義経への想いを語るし、忠信は（モノガタリ

という常套的な小段で）兄継信が勇敢に死んだ合戦の物語を語ります。

歌舞伎舞踊の道行き、清元

今の『義経千本桜』が人形浄瑠璃から歌舞伎に入った際、その道行き「初音の旅」は竹本（歌舞伎における義太夫節）ではなく、江戸の浄瑠璃である清元に当てられました。義太夫節に比べると、常磐津、富本、清元などは語り物として音楽が発展したジャンルで、道行きの風流な華やかな性格を音楽でも舞踊でもうまく表現できたからです。まず音楽ですが、義太夫節と清元が掛け合いの形式で交互に語りを受け持ち、忠信の男性的なところと静御前の女性的なところを見事に語り分けています。それから、身体的にも、役者の肉体は人形より踊り、ふり、しぐさをなめらかに見せます。テクストの世界は同じですが、このように登場人物の旅姿と旅のつらさの中の美しさを理想的に描いています。

清元では道行きが大事な部分を占め、『隅田川』『かさね』『落人』『幻椀久』など曲がそのまま道行きというものも多くなっています。『落人』の主人公は、人形浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』のおかる寛平です。『仮名手本忠臣蔵』では二人が道行

きに出るところしか描かれていませんが、『落人』では二人の道行きが一曲に仕立てられており、人形浄瑠璃からあらたに道行きを作り出した例となっています。

これまで、劇の内容としての道行きについてお話をしてきましたが、今度は形式の目を向けてみましょう。歌舞伎舞踊形式でも、能と同じように、道行きは形式の一部になります。歌舞伎舞踊形式はいくつかの小段（セクション）からなっています。道行きは一曲に欠かせない小段で、主人公が花道から登場し、舞踊・音楽はそれにふさわしい形式となります。それは登場音楽の機能を持っています。主人公がそれまで旅をしてきたことを語り、能のツキゼリフと同様にかならず、到着を表す動詞で終わります。清元のばあいは、「着きにけり」「来たりける」「たどりくる」などになるといいうわけです。次は、『玉屋』の一節です。

さあさあ寄ったり見たり、吹いたり、評判の、玉や玉や、商う品は、八百八町、毎日ひにちお手遊び、子供衆寄せて辻々で、お目に懸値んあい代物を、お求めなされと、たどりくる

（中内蝶二、田村西男編、一九七、一〇三）

終わりに、芸能研究にとつての道行きの重要性

日本の語り物の歴史は、口頭性が支配的な物から書記性が支配的になるまで変化のプロセスといいかえてもいいでしょう。書記文化と密接に交流して、文字テキストや楽譜が成立したばあいでも、口頭的な常套性は決してなくなることはありませんでした。このような常套的な表現の、重要な例の一つが道行きです。なくなるどころか、道行きは口頭的な常套的表現として、語り物が発展するにつれ、むしろ洗練されていきました。

道行きの重要性にはいろいろな理由が考えられますが、ひとつには日本の文化では、旅や巡礼を美的なものにする傾向があるためではないでしょうか。あるいは、一つの世界または状態から別のそれへの移動、あるいは変身することに強い関心があるからでもあるでしょう。それに、プロセスや変化への尽きない興味、変化せずに存在しつづけることよりも、うつりかわることに強い関心があるためでもあるでしょう。言葉を変えると、無常を強く感じることに、あるいは無常への憧れ。

形式上の理由も見逃すことはできません。日本には芸術的な伝統への保守主義

的な偏愛があります。それは語り物の場合には、言語面でも、音楽面でも常套的な素材や表現に対する愛着・こだわり、という形を取ります。その愛着によって、過去のジャンルと具体的なつながりを持つことができず。常套的な素材や表現を利用して、語りの声の権威と厳粛さを作り出してきました。それと同時に、くだけた新しい表現へと進んできました。比較的新しい江戸後期の語り物でさえ、曲はいつも語り物的な常套表現で始まり、終わりました。

【引用文献】

- 高木市之助「ほか」校注『平家物語 下』岩波書店、一九六〇、日本古典文学大系三
高木市之助「ほか」校注『万葉集』岩波書店、一九六五、日本古典文学大系六
近松門左衛門「著」重友毅「ほか」校注『近松浄瑠璃集 上』岩波書店、一九六、二一九五、八
中内蝶二、田村西男編『清元全集』（復刻版）緑蔭書房、一九七、九（日本音曲全集、中内蝶二、田村西男編、日本音曲全集刊行會昭和三年刊の複製）
広末保『漂泊の物語 説経「小栗判官」 異郷からの訪れ』平凡社、一九六
室木弥太郎校注、『説経集』新潮社 一九七（新潮日本古典集成第八卷）
横道萬里雄、表章校注『謡曲集』岩波書店、一九六〇、三一九三、二、四〇一四

- Pigeot, Jacqueline, "Enumeration in the Otogi zōshi and its meaning" The Japan Foundation Newsletter Vol. XVIII\NO. 3 (Jan. 1991)1-7
- Plutschow, H. E., Chaos and Cosmos: Ritual in Early and Medieval Japanese Literature. Leiden, New York, Copenhagen, Cologne: E.J.Brill, 1990

【参考文献】

- 荒木 繁、山本吉左右編注『説経節 山椒太夫・小栗判官他』平凡社、一九三三（東洋文庫二四卷）
- 岩崎武夫、『山椒太夫考 中世の説経語り』、平凡社選書23、「説経節の語りと構造」『説経節』東洋文庫二四卷。
- 角田一郎、「道行き」『日本古典文学大辞典』岩波書店一九三五
- 鳥居明雄、『漂泊の中世 説経語り物の精神史』ペリカン社 一九四四
- 横山 正、『浄瑠璃操り芝居の研究』一九三三
- Pigeot, Jacqueline, Michiyuki bun: Poétique de l'itinéraire dans la littérature du Japon ancien. Paris 1982
- Martina Schoenbein, Die Michiyuki-Passagen in den Sewa-Joruri des Dramatikers Chikamatsu Monzaemon (1653-1724): Strukture, literarische Stilmittel und Rezeption Wiesbaden: Harrassowitz Verlag 1994

発表を終えて

ふたたび、フォーラムでお話しする機会を与えていただき、感謝しています。前は、音楽の話で、すこし専門的でしたが、今回はより広い日本文化のテーマ、道行きをとりあげ、話をしたあとも、活発なディスカッションがあり、みなさんと関心を共有できたことをうれしく思っています。鉄道唱歌も道行きではないかなど、おもしろい指摘もあり、私の理解も深まりました。その後、京都を訪れた、パプアニューギニア音楽の研究者と話す機会があり、その森林の民は川や細い道に沿った地名を連ねて歌をつくることを知りました。くわしく聞いていきますと、それもまさしく道行きだということが分かって、感動しました。

この機会を与えて下さった国際日本文化研究センター、お世話いただいた研究協力専門官篠原初江さん、コメントして下さった光田和伸助教授に、お礼を申し述べます。

A. Tokuta

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIβEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがひ」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 曩七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」

⑨	元. 2.14 (1989)	巖 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リーハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールバルス王伝説における主従関係の比較」
28	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
29	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情—古典から近代まで—」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 —ゲオルグ・マイステルの旅—」
31	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立 大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都—ケンペルの上洛記録」
33	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④5	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 客員助教授) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④6	4.10.13 (1992)	李 栄九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④7	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国・ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考－『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④8	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 －技術移転をめぐるー」
④9	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国・プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間－北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国・プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854~1919) とフリアー美術館 -米国の日本美術コレクションの一例として-
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・日文研来訪研究員) KIM Choon Mie 「日本近代知識人の思想と実践-有島武郎の場合-
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 -旧身分文化との関連を中心として-
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択 : 10世紀の日本と朝鮮 -科举制度をめぐって-
⑤5	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り - 平安朝文学の特質-
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史 -南蛮美術から洋学まで-」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と為作 -井上靖文学における『陰謀』-」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 -俳句の可能性を中心に-」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥3	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880~1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウオ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.10 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験-文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見-王朝文を中心に-」

67	6. 9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) François MACÉ 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥8	6.11.15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6.12.20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦0	7. 1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを 中心に－」
⑦1	7. 2.14 (1995)	嚴 紹巒 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのか かわり－」
⑦2	7. 3.14 (1995)	王 家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「洪沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦3	7. 4.11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心に－」

⑦4	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち－」
76	7. 7.25 (1995)	崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sug 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦7	7. 9.26 (1995)	蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
⑦8	7.10.17 (1995)	李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「一日・中比較文化考－雷神思想の源流と展開」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑧0	7.12.19 (1995)	タチヤーナ L. ソコロワ＝デリュージナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

⑧②	8. 2.13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立 - 近代批評における新語 -」
⑧④	8. 4.16 (1996)	リース・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧⑤	8. 5.28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) Mark Cody POULTON 「能における『草木成仏』の意味」
⑧⑥	8. 6.11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30 (1996)	シルヴァン・ギニヤール (大阪学院大学助教授) Silvain GUIGNARD 「筑前琵琶 - 文化を語る楽器」
88	8. 9.10 (1996)	ハーバート E. プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
⑧⑨	8.10. 1 (1996)	王 秀文 (中国・東北民族学院助教授・日文研客員助教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 - 日本におけるシャクシにまつわる民間信仰 -」

90	8.11.26 (1996)	王 宝平 (中国・杭州大学日本文化研究所副所長・ 日文研客員助教授) WANG Bao Ping 「明治前期に來日した中国人の外交官たちと日本」
91	8.12.17 (1996)	陳 生保 (中国・上海外国語大学教授・日文研客員教授) CHEN Shen Bao 「中国語の中の日本語」
92	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシェリャコフ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪 研究員) Alexander N. MESHCHERYAKOV 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18 (1997)	郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) KWAK Young-Cheol 「言語から見た日本」
94	9. 3.18 (1997)	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル (スペイン・マドリード 国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL 「弁当と日本文化」
95	9. 4.15 (1997)	ミケーレ・マルラ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校 準教授・日文研客員助教授) Michele F. MARRA 「弱き思惟 - 解釈学の未来を見ながら」
96	9. 5.13 (1997)	デニス・ヒロタ (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 バークレー仏教研究所準教授) Dennis HIROTA 「日本浄土思想と言葉 - なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
97	9. 6.10 (1997)	ヤン・シコラ (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) Jan SYKORA 「近世商人の世界 - 三井高房『町人考見録』を中心に -」

98	9. 7. 8 (1997)	鶴田 欣也 (カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・ 日文研客員教授) Kinya TSURUTA 「向こう側の文学—近代からの再生—」
⑨⑨	9. 9. 9 (1997)	ポーリン ケント (龍谷大学助教授) Pauline KENT 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14 (1997)	セオドア ウィリアム グーセン (カナダ・ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) Theodore William GOOSSEN 「『日本文学』とは何か—21世紀に向かって」
⑩①	9.11.11 (1997)	金 禹昌 KIM Uchang (韓国・高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) リヴィア モネ Livia MONNET (スイス・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) カール モスク Carl MOSK (アメリカ・ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン シコラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 鶴田 欣也 Kinya TSURUTA (カナダ・ブリティッシュ コロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」
102	9.12. 9 (1997)	ジョナ サルズ (龍谷大学助教授) Jonah SALZ 「猿から尼まで—狂言役者の修行」
103	10. 1.13 (1998)	姜 信杓 (韓国・仁済大学校人文社会科学研究所教授) KANG Shin-pyo 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」
⑩④	10. 2.10 (1998)	高 文漢 (中国・山東大学教授・日文研客員教授) GAO Wenhan 「中世禅林の異端者—一休宗純とその文学」

105	10. 3. 3 (1998)	シュテファン カイザー (筑波大学教授) Stefan KAISER 「和魂漢才、和魂洋才ー語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7 (1998)	スミエ ジョーンズ (インディアナ大学教授・日文研客員教授) Sumie JONES 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19 (1998)	リヴィア モネ (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Livia MONNET 「映画と文学の間にー金井美恵子の小説における映画的身体」
⑩8	10. 6. 9 (1998)	島崎 博 (カナダ・レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) Hiroshi SHIMAZAKI 「化粧の文化地理」
109	10. 7.14 (1998)	丘 培培 (米国・バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) Peipei QIU 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか ー 詩的イメージとしての典故 ー」
110	10. 9. 8 (1998)	ブルーノ リーネル (スイス・チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・ 日文研客員助教授) Bruno RHYNER 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪1	10.10. 6 (1998)	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ (エジプト・カイロ大学講師・日文研客員助教授) Ahmed M. F. MOSTAFA 「『愛玩』ー安岡章太郎の『戦後』のはじまり」

112	10.11.10 (1998)	アリソン トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison McQUEEN-TOKITA 『『道行き』と日本文化 - 芸能を中心に』
113	10.12. 8 (1998)	グレン フック (英国・シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) Grenn HOOK 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
114	11. 1.12 (1999)	杜 勤 (中国・華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) DU Qin 『『中』のシンボリズムについて-宇宙論からのアプローチ』
115	11. 2. 9 (1999)	シーラ スミス (米国・ボストン大学助教授・日文研客員助教授) Sheila SMITH 「日本の民主主義-沖縄からの挑戦」

○は報告書既刊

発行日 1999年3月15日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048

Homepage Address: <http://www.nichibun.ac.jp/>

問合せ先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

© 1999 国際日本文化研究センター

■ 日時

1998年11月 10 日(火)

午後2時 ～ 4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

